

社会はどういう空間であるのか



橋爪大三郎

子供はいろいろなことを考える。

ある日私は、なぜか自分が世界の「中心」になっていることに気が付いた。こういう恐ろしい事実が気付いて、当惑しなかったらどうかしている。どういふことなんだ、これは?!

自分以外の人間はみな、私でない。それなら世界は、私のために存在するのしか考えられない。当然、他の人間たちも、私のために存在する。私の前で何咄わぬ顔をしていても、実は連絡をとりあって、私だけのための演技をしている。たとえばあの、通りすがりのおばさんも、わざわざどこからか派遣されてきたのだ。私が下校したあと、クラスでは早速みな、明るく日誰が私に話しかけるかなどと、段取りを打ち合わせているに違いない。

急に私が教室にとって返したら、あるいは、こっそり家族の内緒話を立ち聞きしたら、現場が押さえられるかもしれない。そう思うだろうか? — きっと、まだ子供だからだ。それで、わからないのだ。おとなは自分が生まれてきた秘密を、知っているにちがいない。知っていながら、子供に黙っているのだ。だってもしも、そんな大事なことをおとなも知らないのだとしたら、みんな会社や買物なんかほっほりだして、寄るとさわると額を集めてその話に明け暮れ、「自分たちはなぜ生まれてきたか、研究大集会」みたいなものを連日開催していて、当然だからだ。そういう様子もなしに、のんびり日を送っているのが、知っている証拠である。かりに、自分が生まれてきた理由もわからず、めいめいばらばらに死んでしまうのが人間というものなら、こんなひどい話もないじゃないか。

しかし、やがてわかったのは、おとなもやっぱりなんにも知らないうらしい、ということだった。目先のことに追われているうちに、気がついたら年をとり、あとは死んでいくばかり。要するに、はじめ私思ったより、ずうっといい加減な土台のうえに、社会は成り立っているようだ。待合室みたいに、人間が順番に入れ替わっていくだけ……。

*

こんなことばかり考えていたせいかもしれないが、私はいつも、大きなギャップが隠されているのを感じていた。私が生きているという事実と、この社会が営まれているという現実とのあいだの、ギャップ。

てやってみただけでも、もちろん尻尾はつかめない。そうか、こんなに大がかりな計画なら、私の一挙一動などのこらず相手に筒抜けになっているのだな。

「すべての人間が私のために演技している」という仮説は、検証することも否定することもできない。そして、すべてが演技なら、すべてが現実だと言っても同じだ。—— こういう「偉大な真理」にあと一步のところにいた私は、自分も他の人間に合わせて演技(すなわち、彼らが演技していることを知らないふり)を続けなければいのだと納得し、やがてそのことすら忘れてしまった。それを思い出したのは、社会学のなかに「演劇的アプローチ」というものがあるのを知ったときである。

*

こんなことも考えた。

私はどうして、自分がこの世界に生まれてきた理由を知らないのふつうに暮らしているかぎり、むしろ、このギャップは問題にもならない。私の精神構造は、子供なりにバランスのよいほうだったろうと思う。それでも、家族の寝静まった夜ふけに、自分が死ぬこととか、宇宙が存在する理由とかを考えていくと、決まってこのギャップが頭をもたげてくる。そして、思考の行く手を阻んでしまうのだ。

社会がこんなふうな奇妙な構造をもっていることが、ずっと気になっている。私が死んでも、そんなことにおかまいなく、相変わらず社会は続いていくだろう。社会は誰の生き死にからも、超然としている。にもかかわらず、私や他の人びとがめいめい生きていくという個別の事実の、総和以上のところに社会があるはずもない。

こういう奇妙な事態は、さしあたり受け入れる以外にないものなのかもしれない。私は、この奇妙な社会の成り立ちを、「空間」と形容するのが相応しいと思った。

*

「社会は空間である」とは、どういういみだろう。空間といっても、物理的空間とか、ユークリッド空間のことではない。こういうことだ。

A: 私には、身体があるから、生きている。そしてその身体は、物理的空間のなかにある。他の人びとの身体も、やはり同様だ。私の身体も、他の人びとの身体も区別なしに、同じひとつの空間

のなかに並列している。

これで話がすめば、簡単だ。

だが、そうはいかない。Aが本当だとしても、それを誰が確かめたのか。確かめないうちは、Aの文末におのおの、「……らしい」と付け加えておくのが、正確というものだろう。つまり、A全体が私の憶測、ということである。そこで、Aにもかかわらず、

B..他者たちは、私のなかで生きている。この世界にしても私が捉えた、私のなかの世界である。なぜならば、私がいなくなったから、私の知っている他者たちも、世界も、なにかも壊滅してしまうのだから。

とすることが出来る。

だがここでも、話は終わらない。「私がいなくなったら」というが、それを見とけるのは誰か。私は確実に「いなくなる」のか。そのへんがはっきりしない以上、Bも「……らしい」の域を超えないではないか。たまたま死ぬ当人が、Bのようなことを思っているだけで、実は物理的空間のなかの、ある身体が減っただけなのだ。——そういうふうに議論を回収する余地がある。

AとBとの関係が、複雑なことになっているのがわかる。

る。そして(このことは確かめられないが)、私も他者もまったく対称的だとすると、他者もまた、彼の身体の一部を、私(の像)と視ているはずなのだ。私の身体と、他者の身体とは、決して重なりあうことがない。境界を接することもない。われわれは、ガラスとガラスの隙間みたいなもの(空間)を間にはさんで、並列しているのだ。

私の身体、他者の身体が、ひとつひとつの金魚鉢である。身体の並列を、誰も見渡せるはずがない。諸身体は言うなれば、暗黒(非ユークリッド空間)のなかに並んでいる。

さて、身体と身体とが、互いに全然関係をもたないとしたら、そもそも社会の成立する余地はない。たしかに関係しあっているはずだ。では、どうやって?

こう考えてみた。身体から出発し、身体を離れて、他の身体に到達するような作用があること。この作用は、特定の身体でなく、空間(金魚鉢のすきま)に直接帰属する(空間の積極的要素である)こと。

こういう作用として、言語を考えるべきである。言語は、社会の可能根拠を与える。

言語の正体はなにか? 形式である。身体の律動が発振し、空間を波及して、ふたたび身体に律動を刻みこんでいく、形式である。身体と身体のあいだを、こうして形式が循環する。この間身体的な

まず、A(物理的空間)に着地しようとする、尻抜けになってBに移行してしまう。

Bも、Aとそっくりの物理的空間にみえる。ただそれは、私の身体の内側にある(空間の外縁までが私の身体である)ので、Aと同じというわけにはいかない。

ここで、Bに完結しようとしても、安定しない。Bそのものが、ふたたびAのなかに、繰り込まれてしまう。つまり、Aのなかの誰かが頭のなかに思い描いた世界、と解釈されるのだ。

結局、A↓B↓A↓B↓……と、どこまでも反転が続く。その結果、空間は幾重にも繰り込みあって、複雑に折りたたまれていく。

この連鎖を、「……↓A」のところで断ち切ったものを、「唯物的リアリティ」という。また、「……↓B」のところで断ち切ったものを、「現象学的リアリティ」という。近代哲学は、このふたつの様相を研ぎすますことに懸命だった。たしかに社会は、こうした

模相を含んでいるのだが、どちらももう片方なしには完結できない。だから、両方(二重のリアリティ)を内蔵する連鎖それ自体のことを、社会だと考えるほうがいい。

「社会は空間である」のなかみは、こういうことなのだ。

社会が空間である以上、そこでわれわれは、金魚鉢をかぶったみたいにしか出会わないことになる。

私に視える他者は、他者の像にすぎず、実は私の身体の一部であ

形式のことを、言語というのだ。

私が他者のことを知るのも、言語あるゆえだ。私が自分の死を知るのも、言語あるゆえだ。言語は身体に対して、規範として作用する。言語が身体を成形し、社会的存在とするのである。言語の介在によって、先のA↓B↓A↓B↓……の連鎖も、生じるのである。

これまで人びとは社会を考える場合、言語を透明な媒質として無視してきた。しかし、言語を積極的に位置づけられない限り、社会は理解できないのではないか。そういう立場(言語派)をとるようになった私は、最初に宇宙の神秘にとらわれた子供の日の畏敬を、永遠に反復しているような気がする。

Society—What Kind Of Space? by HASHIZUME Daisaburo 1989 June 9月号は、土屋俊先生(哲学)です。

◀世界のイメージ▶

- 1 (296号) 嶋津 格 (法哲学) 進化論ヴァリエーション
- 2 (297号) 正村俊之 (社会学): 高度情報化と近代社会の変容
- 3 (298号) 藤田清一 (倫理学) <世界>というモード
- 4 (299号) 高橋哲哉 (哲学) 灰になった精神、
- 5 (300号) 大塚真幸 (社会学) 美を完結させる乱調
- 6 (301号) 盛山和夫 (社会学) 社会理論のジレンマについて
- 7 (302号) 橋爪大三郎(社会学) 社会はどういう空間であるのか
- 8 (303号) 土屋 俊 (哲学)